

韓國木簡學會の出帆と展望

韓國木簡學會會長 朱甫瞰

一、韓國木簡學會の出帆と最近の動靜

二〇〇七年は、韓國木簡學會にとつて実に意義深い年として永遠に記憶されることと思います。なぜなら、本學會が正式に出帆した年であるからです。學會は、長い間の産みの苦しみを経て、ついに二〇〇七年一月一〇日に結成されました。その記念として、國際學術會議も開催することができました。すでに、木簡學分野において研究が進展している日本と中國から、木簡に精通する幾人かの研究者を招聘し、實に有意義な時間をもうけることができました。その席は、また、韓國木簡學の定立を宣言し、その發展に努めることを固く誓った場でもありました。一九七五年に慶州の雁鴨池（月池）で、はじめて木簡が數十点出土してから、三〇年あまりの月日が経つてのことでした。

雁鴨池から木簡が出土したことが明らかになつた時、これから、木簡の出土が相次ぐものと期待を抱くこととなりました。それまで、中国や日本ではすでに数十万点の木簡が出土していたのにもかかわらず、両国の間に位置する朝鮮半島では木簡の事例がほとんど知られておらず、不思議に感じていました。その当時は、もしかすると朝鮮半島の地質的な特性のためかも知れないと、漠然と悲觀的な憶測すら抱いておりました。そういうするうちに、雁鴨池の發掘が行われ、今後、低湿地に關心を傾ければ、いくらでも木簡の出土を期待しても大丈夫だろうと考えるようになりました。そのことを證明するように、八〇年代に入り發掘調査の件数が飛躍的に増大するにつれ、しばしば木簡が出土するようになり、九〇年代には各地で報告されるようになりました。現在、大体二〇カ所、三百数十点程度が確認されるまでになつております。

未だ、一ヵ所で木簡が大量出土した例はありませんが、数量にして出土地が多いという事実は、非常に励まされます。なぜならば、木簡の埋納地が各地に広がつてることを示しているからであります。王都であつた慶州や扶餘は無論のこと、そこから遠く離れた地方においても出土しております。もちろん、ほぼ大部分の出土地が

生活遺跡というよりは、軍事的、交通上の要衝地に限定されではいますが、それでも、全国的な出土が予見されています。特に、いくつかの山城（桂陽山城、一聖山城、火旺山城、城山山城）からの出土には、大きな期待を寄せることがあります。よく、「山城の国」と言われるよう、韓国は、全国に山城が散在し、そこには井戸や貯水池をはじめとする低湿地が必ず存在するからです。城山山城の場合のように、廃棄場に似た性格も有する山城の低湿地などでも、多量の木簡が発見される公算が強まつたことを示唆してくれています。過去に、慶州の月城垓字では、多くの木簡が出土していますが、現在も発掘調査は進行中であり、また、垓字全体を調査の対象とする計画も進んでおります。以上のようにさらなる木簡の出土が期待できます。このような状況に鑑みる時、韓国でも多量の木簡を廃棄した場所が近い将来確認されるものと予想しております。この点は、今後の考古学研究者の関心にかかる問題とも思われます。振り返れば、一九七〇年代以前まで、木簡が出土しなかつたことは、発掘自体の件数が少なかつたことも一つの要因ですが、低湿地などにそれほど関心を寄せず、また発掘の水準もそれほど高くはなかつたことにも起因しています。これは、ある意味で仕方のなかつたこともあります。現在は、発掘件数も大幅に増え、発掘の質的な水準も大きく向上しており、木簡の出土に大きな期待を寄せることができるようになりました。

正確に言うならば、朝鮮半島で木簡がはじめて確認されたのは、一九三一年平壤の彩篋塚においてでした。ここで一点の木簡が出土しましたが、樂浪時代のものもあり、また一点にすぎなかつたこともあります。しかし、それほど注目されることはありませんでした。事実、木簡出土の可能性は、すでにこの時から予見されていたと言つても良いでしょう。樂浪の木簡と言つても、そこに内在された意味は決して小さくないと思われます。なぜなら、韓国における木簡製作の起源（始発点）をそこに求めることができるという漠然とした推測もできるからです。言い換えれば、朝鮮半島において、比較的早い時期から木簡が使用されていた可能性を示しているからです。一九八〇代に、紀元前一世紀頃と編年される慶尚南道の昌原茶戸里木棺墓から、削刀（刀子）とともに筆が出土したことがあります。その用途をめぐり議論がありましたが、木簡製作用のものである可能性が高いということで整理されています。三世紀頃の全般的な実情から推して考へても、十分に想定可能なことでしょう。当時、三韓の下戸（下層）階級に属する人々が、実に千名あまりも中国の郡県に赴き、交易または交流に従事していました。これは木簡を使用する環境を想定するに十分な事実と考えられます。そこから推測するに、荷札木簡をはじめとする付札木簡、文書木簡など多様な用途の木簡が早くから存在していたようです。未だ、実物が出土したわけではありませんので、断定してしまうことは危険ですが、朝鮮半島にお

ける木簡使用の始発点は、私たちの考え以上に、遡る可能性はより高まっていると思います。

さらに、楽浪の木簡と関連して二〇〇七年初頭に、新たな資料が確認されたという消息が知られ、研究者たちを興奮させました。韓國木簡研究の対象範囲が大きく広がる契機となつた出来事の一つとしてあげができるでしよう。まるで、その直前に出帆した韓國木簡學會の發展を祝つてゐるかのようでした。漢の元帝初元四年（紀元前四五年）當時、樂浪郡に屬していた一五県の人口と戸口構成などを主な内容とする文書とおまかなか内容のみが、現在公表されているだけで、出土地点や発掘当時の状況および保存状態など（おそらく中国で言うところの木牘とおもわれます）、基本的な事項については未だ公開されていませんが、韓國木簡學史において特筆されている発見であることは間違ひありません。これはまた、中国史研究者までもが、韓國木簡研究に参加する契機になり、韓國木簡研究に加わる研究者の範囲も大きく拡大しています。最近、入手した情報によれば、この楽浪木簡の資料とそれに関連した諸事情については、もうすぐ正式報告書が刊行されるようですが、その成果を待ちたいと思います。今回のものは、古墳壁画にみられる編綴簡のようであり、相當に早い時期に活発に用いられていました。今は、その片鱗さえも全く確認されていない高句麗の木簡にまで、関心が広がっていく契機になればと考えています。北朝鮮の学界が少しで

もこの方面に関心を持つてくれれば、高句麗木簡の出土も時間の問題ではないかと考えています。

この一〇月には、もう一つのうれしい消息がマスコミによつてもたらされました。忠清南道の泰安で高麗後期の青磁を積んだ難破船が発見されましたが、それには三〇余点の荷札木簡が取りつけられていたのです。海に面した全羅南道康津の青磁窯址で製作した器を、高麗の王都である開城に運んでいた途中で座礁したようで、木簡は青磁の生産・流通の様相を紐解くための糸口を提供する資料として大きな注目を集めました。まさに何日か前の一月二十四日に開催された韓國木簡學會のセミナーにおいて正式に紹介されました。これらの木簡は高麗時代のものではありますが、木簡研究の時間的な対象範囲を大きく広げてくれた点においても大きな意味があつたといふことができます。今後、海底でも木簡が大量に出土するのではないかと期待を抱かせてくれます。事実、一九八〇年代初に全羅南道の新安近海で、元代に中国から日本へ航海する途中で難破した船の中から、荷札木簡が多量に出土したことがありました。当時、韓国学界では、それが元代の事情、あるいは日中の貿易とのみ関連する限定的な資料と理解し、それほど関心を寄せるとはありませんでした。それでも、海底から木簡が出土するという事実は、そのときからすでに予告されていたようなものでした。それ以前の古代社会において、船が難破しなかつたわけではないでしょうから、今後、

海底から古代の木簡が出土することを期待したいと思います。

このようにみれば、韓國木簡學會が出帆してから、わずかの期間で新たに樂浪と高麗の木簡が出土したことは、非常に重要な意味を持つていると評価できます。韓國木簡學會の時空的な範囲を大きく広げる契機になったからです。このことは、やや時期遅く結成された韓國木簡學會が、今後大きく成長、発展していく兆候ではないかと考えます。そして、最近、忠清南道扶餘の市街地の現代（ヒヨンネドウル 地名）で、新たな木簡が一〇余点出土した事実も付け加えておきます。

二、城山山城木簡と韓國木簡學會

韓國木簡學會と関連して特に注目する必要があるのは、慶尚南道の咸安城山山城から出土した木簡です。この資料は、韓國木簡學會と非常に深い結び付きのあるものです。二〇〇七年初頭に学会の創設を目指した基礎作業を進行していたところ、二〇〇六年一二月に城山山城で再び新たな木簡が出土したという、うれしい消息を耳にしました。この発見は、木簡學會創設のために奮闘していた人々にとって大きな力となってくれました。城山山城は一九九〇年代初頭以後、十数次にわたって発掘が行われ、そのなかすでに何回かにわたって木簡が出土しています。一九九二年に初めて六点の木簡

が出土して以来、九四年に二一点、二〇〇〇年に二点、二〇〇二年に九二点、二〇〇三年に一点出土し、そして二〇〇六年には三八点が出土しました。そのうち、多量に出土した一九九四年と二〇〇二年、および二〇〇六年の場合は、韓國木簡學會とは切つても切れないと結ばれています。そこで、ここでは、特に城山山城の木簡との結び付きについて振り返ってみようと思います。

城山山城の発掘調査を主導した昌原文化財研究所では、一九九九年出土の木簡の重要性を認識し、国内外に広く知つてもらうために、国際學術大会を開催しました。その際に韓國古代史學會に協力の要請がありました。私が、その時に学会の会長職を担つておりましたので、自然とその業務を受け持つこととなりました。そこで、平素から関心を寄せていた国内の研究者をはじめ、日本における木簡研究の権威たる国立歴史民俗博物館の平川南先生と早稻田大学の李成市先生、そして中国木簡学の大家である中国社会科学院の謝桂華先生（二〇〇六年六月別世）を招聘し、国立歴史博物館において国際會議を開きました。当時、私は学会長として行事を主導しながら、その後の木簡学の定立のためには学会の設立が必要だということを痛切に実感し、近いうちにそれを推進するということを、會議の場で言明してしまいました。そこには、出土木簡が少數であるうちから体系化を試みることで、研究の方法や方向性を定めることが容易になるでしょうし、また木簡に振り向きもしなかつた考古學界がこの

分野へ関心を寄せるようになれば、将来、資料が増加するのではないかという計算があったことも事実です。振り返ってみれば、当時の高揚した雰囲気に自ら乗ってしまった、あまりにも軽率な発言であつたと後悔しきりです。なぜならば、その後、一日でも早く木簡學會を組織しなければならないという強迫観念にとらわれ、強いストレスを継続して感じてしまっていたからです。

それから、幾年かの歳月が流れた二〇〇三年末に、昌原文化財研究所から、二〇〇一年に多量出土した木簡資料の共同判読に参加してほしいという依頼を受けました。当時、昌原文化財研究所では城山山城木簡の重要性を再確認し、それを浮彫りにしようという意欲を持っていたと記憶しています。それを聞いて、全うな判断であると積極的に協力することにいたしました。私をはじめとする五名の研究者が、二回にわたり实物と赤外線写真を交互に検討しながら、できるだけ縦密に判読作業を行いました。研究者の間には、若干の意見の違いがありましたが、それを忠実に反映させた成果を発掘報告書に掲載いたしました。その際に報告書の刊行作業を取りしきつていた鄭桂玉学芸室長が、それまでに出土した木簡資料のすべてを対象に、赤外線写真および釈文を整理し、一冊の本として出版するはどうかという提案をされました。私は非常に意義深い作業だと同意し、その方法や出版にいたるまでの過程について若干の助言をいたしました。その結果、短期間に編集作業が進み、二〇〇四年に

『韓國の古代木簡』という本が、韓国語版と日本語版同時に刊行されました。研究者にとって有益であるように、発掘報告書が刊行されていなかつた木簡も対象とし、その時まで知られていた木簡の大部分を網羅することができました。これは、非常に活動的な鄭室長の献身的な努力によるところが大きく、韓國木簡研究史に残る業績として記録されることでしょう。これによつて資料の活用が非常に容易になりました。以後、比較的短期間のうちに、多くの研究がなされたことも、この業績によるところが大きいでしょう。

しかし、この本の刊行によって、私がさらに重い圧迫を受けるようになつたことも事実でした。なぜなら、木簡學會を一日でも早く結成しなければならない状況になつたためでした。そこで、二〇〇五年のある時、東国大学に在職しながら平素から木簡に深い関心を寄せていた尹善泰教授と、当時国立中央博物館に勤務していた李鎔賢先生のお二人に、木簡學會を設立しようと思うが助けてくれないかと依頼しました。お二人とも、その場で快く引き受けくださいました。ただ、その後それぞれが仕事に忙殺され、なかなか進展しませんでした。そのような状況の中、また数カ月が過ぎてしまい、もどかしく感じていた私は、今一度、學會設立に関心を持たざるを得なくなりました。二〇〇六年一月初旬に、ソウル駅付近でお二人と会い、近いうちに積極的に推進していくことを決め、具体的な設立の方法と參加範囲などについて議論しました。大きくは、尹善泰

教授が実務的な仕事を受け持ち、私は対外的なことをはじめとする大きな問題を中心に担当することとしました。木簡の性格上、学会は学際的なものでなければならず、研究者の参与範囲は、韓国古代史をはじめとして国語学、書芸学、考古学、中国古代史、日本古代史など、様々な分野まで含めることとしました。また、学会設立を具体的に推進していくために、木簡資料を所蔵している機関を二ヵ月に一度ずつ訪問、資料を実見することにし、時には共同で判読を行なながら研究者相互の認識の違いを狭めていこうという方向性を共有しました。そして、四月に初めて、扶餘博物館においてセミナー形式の集まりを設けました。ようやく、学会出帆のための基礎が準備されたのでした。以後、慶州、ソウルなどを巡りながら、二ヵ月に一度ずつ集まりを設けセミナーも行い、さらには学会設立のための関連事項について議論しました。そのような過程を経て、二〇〇七年一月に正式に学会を立ち上げることを決議するに至ったのでした。

すでに述べてきたように、学会設立の準備をしていた一二月に咸安城山山城で再び新たな木簡が三〇余点出土した、という消息を耳にしました。この時は本当にうれしく思いました。もうすぐ出帆する学会を輝かせてくれる、ある意味で運命的な出来事と感じたからです。この時、城山山城と木簡學會は、切っても切れない縁で結ばれていると感じました。発掘現場が初めて公開された日、私は雑務を振り切って現場に向かいました。新たに出土した木簡は、それまで知られていた内容に大体沿うものや、それをさらに補完してくれるものでした。今回の発掘調査において特記しなければならないのは、これらの木簡が一定の層位をなしていることが確認できた点でしょう。それ以前には、城山山城の東門入り口が地形的に低かったために低湿地が形成され、そこに木簡が流れ込んだと考えており、層位についての理解は十分ではありませんでした。しかし、今回の調査を通して、築城当時には、すでに低い所に意図的に埋められたという事実が初めて確認されました。そこから考えると、大きく二つの成果を得ることができたと判断できます。

一つは、木簡の作成年代が築城時点よりもさかのぼるということが確認された点です。これまで、建築の年代を木簡自体と文献史料を根拠として、五六一年前後と推定してきましたが、木簡の年代はそれと同じような時期か、もしくはそれよりもさかのぼり得るということになります。おそらく、木簡は築城と同時に役目を終え、廃棄されたものと考えられ、木簡が築城と密接に関係していた可能性が非常に高くなりました。もう一つは、木簡が埋納された層位が確認されたことによって、今後も同じ層位において、継続して木簡が出土する可能性を予測することができるようになったことです。これは、今回の発掘調査によって得られた非常に貴重な成果であり、木簡學が考古学と切っても切り放せない関係にあるという事実を証

明してくれました。事実、これまで木簡は単に文字資料として活用されるのだという理由から、考古学研究者は、木簡を考古資料として認めない傾向がありました。そのため、木簡学は文献史学の管轄と断定し、冷淡な態度を取つてきました。これは、ある意味では韓国文献史学界に対しても考古学界が持つていた強いコンプレックス（？）の裏返しでもあったのかも知れません。しかし、今回の発掘を通して、木簡が遺物包含層の層位や遺構の絶対年代を判別する重要な端緒になるという事実が確認されることになりました。すなわち、木簡が重要な考古資料であることが立証されたのです。そのような意味においても、二〇〇六年の発掘調査は、非常に意義深いものと考えます。同じ層位から木簡が今後も出土すると予測できるという事実は、考古学を科学的な学問としての位置を占めるようになつたという側面からも、その意味が大きいと思います。おそらく、私が帰国した頃には、この点が証明されているものと確信していくます。今日、この場に参席されている方々は何日か後に、マスコミを通してそのような消息を耳にされると思います。まるで、私が日本木簡学会に参席することを祝つてくれているかのような錯覚に陥ります。このように、咸安城山山城と韓國木簡學會があまりに深い因縁があるという想念が、脳裏に焼きついて離れません。

今までの経過を振り返つてみると、研究者が関心を寄せる程度に比例して、資料の量も増えてきたように思います。韓國木簡學會が出帆した今年に木簡資料が多く確認されたことは、若干恣意的な面もあるかも知れませんが、そのことを示してくれていることとして理解できます。このような趨勢が続いてくれるのであれば、近い将来、多量廃棄された廃棄場のような遺跡が発掘されるような予

三、おわりに

今、韓國木簡学は、その一步を踏み出しました。日本や中国と比べると、出発時点のみならず、木簡の質や量、研究の水準もまだまだ十分ではありません。今後、両国の水準に追いつくためには、多くの研究者の不断の努力が求められます。その際に、研究の先頭走者である日本の研究者の、暖かいご声援とご助力が必要だと考えております。私が、この席に参りました目的の一つも、まさにそこにあります。「追いつく」という表現をしましたので、気を悪くされたかも知れませんが、心配されたり恐がつたり（？）しないでください。対象も異なりますし、今の私たちでは日本の競争相手になることも難しいともいいます。ただ、そのような事情も含めて、両国の木簡学がともに発展していくことを祈念する意味からの言葉なのです。

感もします。いや、近いうちに必ずそのような日が訪れると確信いたします。ある中国史の研究者が、木簡があふれるように多く出土するようになつて研究が難しくなつたと、うれしい悲鳴をあげていました。しかし、彼の言葉は全く根拠のないことでもありません。

そのような意味においても、未だ数少ない資料を丁寧に分析し、体系化していく作業を絶え間なく進め、新たな資料を用いてそれを補完していくべき、十分な成果を上げることができると考えております。

あるいは、その前に、予想すらもしない木簡の大量出土があれば（夢のような話かもしませんが）、本意ではなくても、その資料は一時、死蔵されてしまうかも知れません。一足遅く出発した私たちの立場からいえば、ゆっくりと歩を進めていくことで、日本や中国の学界がこれまで歩んできた道程を注意深く検討していくことで、大きな失敗や無理を繰り返すことがないという長所があるのではないかと思います。私たちは、基礎を固めるのに十分な時間を持つことができるのです。そのようなことを考えつつ、日本や中国の研究水準に早いうちに、少しでも近づくことができるのではないかと、自らを慰めています。

過去に、木簡を用いて文字や文化の伝播や情報の伝達、交流が行われたように、これからは木簡学を媒介として、東アジア三国の情報、文化の交流および疏通が行われなければなりません。私たちが担える役割の一つも、ここにあると考えます。私が今回参席しよう

ときめたことも、この点をとくに強調したいからでした。今後、木簡を媒介とした東アジア研究者間の学術的な交流が活発に続いているように、精一杯努力していきたいと思います。

最後に、招聘してくださった日本木簡学会に深く御礼申し上げます。